

#### 四、狒々の出檻

著名な雑誌『宇宙の心』に、人を驚かす議論を発見した。文は「狒々の出檻」と言う。大意は、毛人の時代には、人類は暴力によって、多くの同族の狒々・猩々や大小の猿族を捕え、鉄の鎖で縛り上げ、鉄の檻に閉じ込め、苦しい仕事を強制した、と言うものである。これらの狒々たちは当初はやはり反抗したが、結局は革の鞭と飢えの力に敵わず、服従するしかなく、毛人の奴隷となった。何千年経ったかしらないが、お互いの体毛も皆抜けて、区別がつかなくなり、鉄の鎖も檻も要らなくなった。しかし奴隷根性は出来上がっていて、永遠に精神の奴隷族となった。実は血統上ではもはや混合していて、階級はわからなくなったが、彼らの心には一種運命的な階級観があり、たとえば他人と己の不平等を見ると、自らを慰めて、“あいつはきっと毛人だ。俺は当然狒々でしかない、なら分に安んずべきだ”と言う。このためにお互いに事なきを得、彼らの評論によれば、道徳の高さは世界の模範たるに足る。……しかし不幸にも専門の学者の考察によると、この理想的な制度はすでに次第に破壊され、狒々は習慣の鎖を断ち切って、檻から出ようとしている。檻から出た結果はどうなるか、その学者は説明はせず、みんなにまず警告を与えたいに過ぎない。

この警告が出てからは、社会には急に大恐慌が起こった。みんな——およそ自分は狒々ではないと思っている人々——は二人三人と一緒にあって討論し、万全の対策を見つけようとした。彼らの意見はたぶん三大派に分けられよう。

反動派 彼らは、毛人時代の制度を復活し、各工場に鉄の鎖鉄の檻を“徹夜で铸造”するよう命令し、あらゆる狒々階級を拘禁して、今まさに鉄の鎖などを铸造している者を最後に拘禁するよう許可せよと主張する。

開明派 彼らは、狒々階級を教育し、彼らが解放を求めるのを助け、たとい不幸にして決裂に至っても、彼らに教育がある以上、なんの大恐怖も出現するはずもないと主張する。

経験派 彼らは、反動派と開明派はいずれも庸人の取り越し苦労で、狒々が檻を出るはずがないと考える。身体にかけられた鎖は、一度取り去られて人は自由になっても、心にかけられた鎖の拘束は、少なくとも終身のもの。その解放の難しさは、かけられた時間の長さと同比例する。彼らは経験を基としているので、この名称を得た。もし反動派の観点から見れば樂觀派とすることができる、開明派からは又悲観派となる。

以上三派の意見には、それぞれに信徒があつて、新聞雑誌で鳴り物入りで宣伝しているが、これから結果はどうなるかは、まだわからない。反動派の主張はもちろんあまりにも横暴すぎるし、しかも実際にも間に合わない。開明派の意見はもともとずいぶんと高尚なのだが、その点で、やはり同じように間に合わない。そういう自ら狒々階級であると認める人には階級闘争という考えはないけれども、一種の階級意識は多分にある。彼らは自分が一個の狒々であると自認し、卑賤であると思っているが、同時にまたすこぶる尊貴でもあるようだ。だから彼らは他人が言うことを受け入れられない。彼らの不幸と屈辱を持ち出し、たとい十分同情的に話したとしても、彼らは必らず怒り狂って、話す人に対して漫罵や匿名の暴露をやって、この人は自分たちの

尊厳を犯したと考える。しかも彼らはあまり話の内容を理解せず、特に風刺の言葉を、彼らは真に受けて、逆の結果になって、頭にきて言い争う。こうしたことから考えると、開明派の文字言語によって心の革命を企てる運動は、いまのところやはり行き先が見えない。

狒々がもしほんとうに檻を出るなら、上の二つの計画はいずれも間に合わない。——それでは経験派の檻を出ないという説は唯一の正確な意見なのだろうか。わたしにはわからない。“時間”先生に訊くしかない。

これがどこの国の事であるのか、醒めるともう忘れてしまった。だが要するに我ら震旦に起こっている事ではないことを、特に声明しておく。

※初出：1922年8月22日『晨报副刊』